



めがね



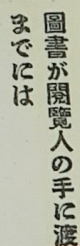
名古屋市図書館 100 周年

量與

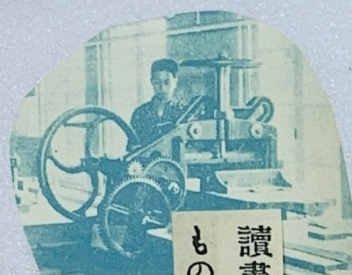
第五回

開館100周年プレ企画

図書館のルーツを求めて



「メチャメチャ」の語源を知りたい



讀書は自分を高め深め自分の内容を豊富にするものなり

イプライターは能率器である

過去を手にいれる

図書館をどう利用したらよいだろう？



兒童のた
めになる

贊

おはなしの會

十一月六日午後一時か

市立名古屋圖書館で

おはなしの會を開きます

一粒の涙
恒川吉次郎氏

一、坊やの拓夢 吉川正雄氏

だれでも はいれますから さそひ
あつて おいで ください

大正十五年十一月
市立名古屋圖書館

新らしい意味の圖書館

ヤングコーナー誕生



毎月どれ位利用者があったか

名古屋市鶴舞中央圖書館

12	1	2	3
月	月	月	月

What's this magazine ? めがねとは

この冊子は、図書館で働いている私たちのことをうっすら知ってほしいという思いで作っています。名前の由来は図書館司書＝めがねというイメージから。

／めがねな一冊／ ともだちは海のおい

工藤直子／作 長新太／絵 理論社



お茶が好きで、体操が得意で、ものごとをすぐ実行に移すいるか。ビールが好きで、よく詩や小説を書き、ものごとをじっくり考えてみるくじら。ふたりは見た目も性格もちがうけれど、お互いのことを大切に思う気持ちは同じです。本が好きなくじらは、口の中に入りっぱな書齋を持っています。そして心理学など、「学」という字のつく本をよむときは、めがねをかけることにしています。

あるとき、いるかがくじらを訪ねると、くじらは本をよんでいないのにめがねをかけていました。理由は「哲学的な一日」を送ろうと思ったから。

それを聞いているかは言います。「あんた、いつだって、てつがくてきじゃない！」。

賢そう、頭が良さそうといったイメージのあるめがねですが、本当にそうであるかは、その人の内から自ずとにじみ出て伝わるものなのですね。

*図書館の中での置き場所などくわしいことはおたずねください。

第五回 開館100周年プレ企画 図書館のルーツ を求めて

世は空前のご先祖探しブーム。図書館にも毎日のように家系図を求めるお客さんがいらっやいます。

ならばそのブームに乗かって、図書館の歴史を振り返ってみるのもいいかもしれない。奇しくも来年は図書館が開館してちょうど100年。過去をたどる絶好の機会です。

そう思っていた矢先、偶然にも右の記事を見つけました。今から約40年前、まだ図書館が古い建物だった時代の様子を、当時の職員が映像に残したというのです。今回、さまざまな方の協力を得て、その映像を探し出すことに成功。あわせて当時を知るOBの方々にお話を聞くことができました。

40年というと、およそ人が働きはじめて定年を迎えるまでの時間です。歴史が動くにはちょっと短い、だからこそ気を付けていないとあっという間に忘れられてしまう時間。それを書き残したい。

図書館と、そこで働く人間のささやかな営みを読み取っていただけるとうれしいです。

壊される前の鶴舞中央図書館のすり減った階段＝映画のシーンから



歴史語るすり減った階段

『鶴舞図書館』を映画に

職員有志が製作

県内の図書館職員有志でつくる「図書館ネットワーク体制研究会」(事務局・名古屋市天白区)が、全面改築される名古屋市の鶴舞中央図書館の改築前の姿を残しておこうと、同館の一日を追った映画を自主製作した。8月、トキエカラー、三十分。題して「名古屋市の鶴舞中央図書館―九八一年の記録―」。

大正十二年に開館した鶴舞中央図書館は、同市内最古の図書館。

貴重な資料を集め、市民に利用されてきたが、書庫が狭くなつたうえ、これまでの閉架スタイルでは新しい時代の図書館として機能していけなくなつたことなどから、全面改築されることになった。

それを機に、思い出の刻まれた建物や内部、本の貸し出しに走り回った職員たちの姿をいつまでも、同研究会でシナリオをつくり、カメラを回して映画にした。

映画はトロイメライのメロディをバックに、鶴舞図書館の全景からスタートする。「緑にとけこんだその姿は、すでに一つの風景でしただけのナレーション。静かに館史が語られてゆく。

開館は関東大震災の一月後の十月一日だった。昭和二十年三月十九日の名古屋大空襲で破壊され、戦後の二十四年三月、名古屋市議会が再建を決議。二十七年九月十日、再建の本館がオープンした。

図書館法が制定され、制度も整って図書館は活況の一途。市民を迎える図書館員たちの忙しい一日がスクリーンに展開する。閉架方式なので、職員は受け付けと書庫を走り回る。すり減った木製の階段のクローズアップ。全国で二番目に開設された片学文庫も画面に。

いまや利用者の六割は児童だ。かつての、学生の勉強室は様変わりした。

ところで、同館はすでに三月に取り壊しにかり、映画ができたいまはガレキの山。改築工事が完成するのは五十九年四月。それまではプレハブの建物で貸し出しをする。

改築後の同館は、閉架スタイルに改められ、三階は百万冊の本が並ぶ大書庫になって、新たな歴史を刻むことになる。

中日新聞 昭和56年9月6日朝刊の記事
中日新聞の許可を得て転載しています。

1階と2階は吹き抜けになっていました。

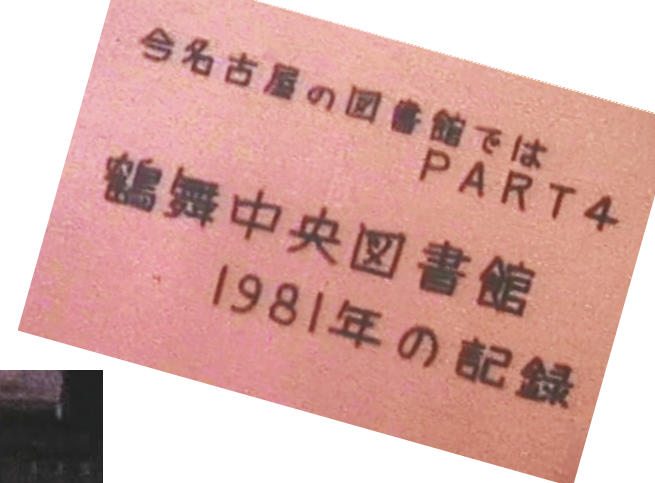


パソコンのなかった時代、本の情報は目録カード（題名や著者名などが書かれたカード）で管理していました。そのカードはタイプライターを使って作成。今とは違うスキルが必要でした。

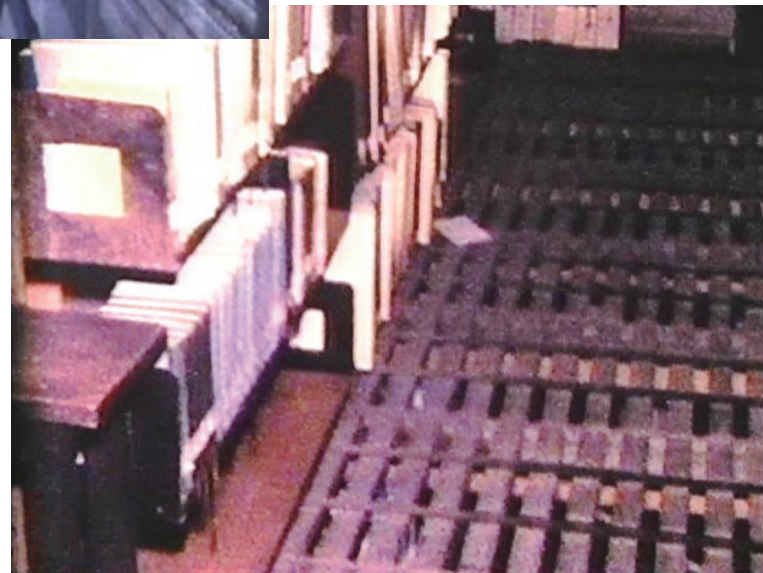
タイプライターが現役だった



書庫請求するために、
読みたい本の目録カードを
探すお客さん。



書庫の床がすけすけだった



下から丸見えのすけすけ構造。スカート厳禁。当時は多くの本が書庫に入っていたため、お客さんは読みたい本を窓口で請求し、それを受けて職員が書庫（5階もある！）の中を全力疾走して取りに行くというスタイルでした。

そよかぜ食堂という名なのに全然そよかぜが吹かなさそうな食堂があった



「黒澤明の映画から抜け出たような」（古田部さん談）ザ・昭和の雰囲気だったとか。食堂内には鶴舞図書館ノートが置いてあり、訪れた人たちがメッセージを書き残したそうです。

40年前も子どもはやっぱりかわいかった



児童室で大好きな本に没頭する子、
おはなし会で夢中になっておはなしを聞く子、
みんなみんなかわいい！現在は40～50代になっているはず。
この頃のこと、覚えている方はいるでしょうか。

事務室の汚い机…

散らかり具合は今と変わりません。



点字文庫もこのときすでにありました。

映像はもしかしたら100周年企画のひとつとしてみなさんにも観ていただける…かも。お楽しみに！



8mmフィルムで振り返る



昔の鶴舞中央図書館ってこんなところだった！

大正時代に開館した初代図書館は、残念ながら戦災で焼失。今回ご紹介するのは、その後建てられた建物です。昭和27年に開館し、次の建物に替わるまでの約30年間、戦争を生きのびた人たちの「学びたい」「知りたい」に応えつづけました。

旧鶴舞中央図書館で働いていた 酒徳重典さんのおはなし

建て替え前の図書館で1年半ほど勤務しました。その頃はエレベーターもブックトラックもなかったの、本は全部手で抱えて運んでいました。遅番のときも朝は同じ時間に出勤していた（※現在はシフト制）ので、その日はだいたい10時間くらい働いていたことになりますね。そう考えるとなかなかハードでした。

映像にあるとおり旧書庫の床は「すのこ」ですけていました。薄暗かったとはいえ、床下が気になる女性職員は多かったと思います。古い建物だったので、夏は暑く、冬は寒かったです。特に書庫の最上階は、夏には熱気がこもって独特なおいがしていたのを覚えています。今思えば、戦災で焼け残った什器や資料のにおいだったのかもしれませんが。

1階にあった「そよかぜ食堂」は早くて安いのでよく利用しました。裏メニューで「カツ別」というのがあって、カツ丼のカツとごはんを別々に出してもらっていたのを覚えています。昼休憩は早めにごはんをすませて、残りの時間



卓球に興じる若かりし頃の酒徳さん（左）

当時を知る方の証言

に卓球などをしていました。好きな人たちが集まってやっていたという感じです。ときにはソフトボールもやっていて、図書館チームとして市職員の大会にも出ていました。弱かったですが（笑）。

あの頃は今より娯楽が少なかったですし、職員同士、仕事以外のつながりも強かったと思います。何かといえば理由をつけてよく飲み会を開いていました。毎週のように飲みに行っていた人もいましたね。忘年会も、あるときは知多の方まで遠出して一泊し、翌日はいっしょに釣りに行ったこともありました。

わたし自身は図書館人生の多くを整理課で過ごしたので、レファレンス（調べ物の相談）などのいわゆる「司書らしい」仕事はあまりやってきませんでした。整理課の仕事の中で、一番大きかったのは、やはりコンピュータの導入でしょうか。最初は目録カード（本の情報が書いてあるカード）を機械化するところからはじめました。それまでは手書きか、タイピングで職員が一枚一枚作っていたのを、機械で印字できるようにしたのです。名古屋市のコンピュータ導入は比較的早く、システム開発の会社も最初は図書館のことがよくわかっていなかったの、図書館の要望を理解してもらうのが大変でした。

今ではコンピュータで当たり前のように図書館の情報を管理していますが、導入当時は反発もありました。理由はいくつか考えられますが、人間は慣れ親しんだ環境を取り上げられると（便利になるとわかっていても）拒否反応を引き起こす生き物なのだと思います。

これからの図書館に望むことは、大変でしょうががんばってくださいということくらいです。年配者が出しゃばって言うことは特になくて



Wing（ダブリング）のこと

ネットワーク研究会で作った「図書館用語豆事典」（1979年）の中に「Wing（ダブリング）」という項目があります。意味は「ダブって何かをする」こと。今ではカウンター業務のかたわら自分の仕事をするのは当たり前ですが、当時は「非情（原文ママ）な状態」とみなされていました。

す。次の世代の人たちがやりたいようにやればいいし、よくないと思ったものはどんどん変えていけばいい。その代わり、変えるなら状況をよく検証して、覚悟を持って臨むこと。場当たり的なことばかりしてはだめです。

自分が長年関わってきた仕事や、積み上げてきたものが変えられることにも、特にこだわりはありません。大事なのは、昨日ではなく今日です。明日につなげる今日です。今をちゃんと生きてください。

映像を作った研究会に所属していた 古田部純子さんのおはなし

この頃は図書館の中に児童サービス、ヤングアダルトサービスなどいくつかの研究会があり、自分の関心のあることについてより深く勉強することができました。わたしはこの映像を制作した「ネットワーク研究会」に所属していました。制作には直接は関わっていないのですが、担当されていた方がとても熱心で、当時の様子を映像に残しておきたいという強い思いがあったのだと思います。

ネットワーク研究会では、図書館同士のやりとりの仕組み、たとえばそれぞれの図書館にある本を貸し借りしてお客さんに利用してもらう方法などを研究していました。今はコンピュータで管理しているので、どこの図書館にどんな本があるかすぐにわかりますが、それを当時は手動でやっていたわけです。むしろその仕組みがきっちりしていたために、わざわざ切り替える必要はないと、コンピュータの導入がなかなか進まなかったくらいでした。

良い時代だったと思います。研究会は図書館の研修計画の中に位置づけられていたため、仕事として行うことができました。他県で開催される研究集会に行き、そこで情報交換をしたり、つながりを深めたりすることもできました。今働いているみなさんはとても多忙で、そういった機会を持ちづらくなってしまったのは残念ですね。何かを深く学んで、それを形にするためには、ある程度の余裕が必要のように思います。



どうなる？ これからの名古屋市図書館

われらがボスに聞いてみた

市内に21館！ そのすべてを統べる大沢中央館長に、
図書館への熱い思いを聞いてみました。

―館長に就任されたときは、すでに「コロナ禍」だった中でしたね。

図書館のあり方を見直すきっかけになりました。具体的には、自宅にいなから本を楽しめるよう電子書籍サービスをスタートさせました。これは感染防止対策になると同時に、今まで家が遠いなどの理由で図書館まで気軽に来られなかった人たちにも使ってもらえます。「非来館型」サービスについてのニーズは今後高いと思いますし、他にできることはないか引き続き考えていきたいです。

―館長になるまでも、きつといろいろな取り組みをされてきたことと思います。印象に残っていることはありますか？
守山図書館で係長をしていたときに、開館30周年で何かしようということになって、通常は6冊貸出のところ、夏休み中はクイズに正解できたら8冊貸出できるようにしました。実は、貸出冊数は名古屋市図書館の全館に関わることで、簡単に変えてはいけなかったらしく、中央館から呼び出しをくらって怒られました（笑）。でも実際にやってみたら子どもにも大人にも好評で。クイズに答えないといけないので、お客さんと職員との間で会話も生まれてよかったと思っています。わたしもクマの着ぐるみを着て接客しました。

―すてきですね！

もちろん、全部をひとりで行えるわけではないですから、周りの人たちの力も大きかったですよ。わたしは自身やりたいことよりも、他の人たちのやりたいことや得意なことを、今求められているサービスと結びつけて実現させていく方が向いているし、好きですね。

実はわたしは名古屋市図書館で働いている期間はそんなに長くはないんですよ。10年ほど短大の図書館で働いて、係長に昇任すると同時にこちらに来ました。最初は基本的な用語などもわからない状態で、何でも周りに教えてもらいながら仕事をしてきました。今でも実務経験豊かな職員さんたちのことをとても頼りにしています。

―名古屋市図書館のいいところはどんなところでしょうか？

市内に21館もありますから、いっせいに同じことをするときの発信力はすごいと思います。一方で、いつも同じでなくてもいいし、それぞれの館でいろんな行事や取り組みができるのも強みだと思っています。それぞれが独自のカラーを打ち出せれば、誰かしらの琴線に触れることができますから。

最近はこちらにもライブラリー※1のように、建物館とまったく同じサービスはできなくても、市民のみなさんのより身近な場所に「本と出合える場」が増えるといいなと考えています。

―今まで図書館を使っていなかった人たちにも利用してもらいたいですね。

少しでも多くの人たちに読む喜びを知ってほしいですし、そのために利用される努力を続けていきたいです。ただ、読書体験というのは必ずしも図書館の本だけで得られるわけではありません。たとえば目が見えない方にサピエ図書館※2を紹介したり、保健所での読み聞かせ事業※3を通じて家にある本を親子で楽しむ習慣を身につけてもらったり、そうした取り組みは貸出実績には現れませんが、図書館の大事な役割だと思っています。

―来年はいよいよ100周年ですが、何か特別な企画はありますか？

具体的にはまだ言えないのですが、市民の方たちに参加してもらえそうな企画を考えています。ボランティアさんなど、今まで図書館を支えてきてくれた人たちとも何かいっしょにやれたらいいですね。普段図書館をよく利用してくださっている方々に楽しんでもらえると同時に、初めての方々にも関心を持ってもらえるような年になりたいです。

用語解説

※1 ニにもライブラリー…地域のちよとしたスペースを間借りして作られたミニ図書館。現在市内に3カ所。親子で楽しめる絵本や児童書が並ぶほか、不定期でイベントも。

※2 サピエ図書館…視覚障害のある方向けの全国的なオンラインサービス。会員になると、点字図書・録音図書の書誌情報やデータの利用などができる。

※3 保健所での読み聞かせ事業…市内の保健所にて乳幼児健診時に、絵本の読み聞かせや、おすすめ絵本リストの配布などを実施している。



ざっくりわかる 名古屋市図書館 100年のあゆみ

大正12年 開館

昭和20年 空襲で焼ける。7年後、
新館（4ページ）開館

昭和32年 中央館に伊藤圭介像
が立つ

昭和34年 伊勢湾台風襲来

被害を受けた地域の子どもたちを元気づけようと、自動車図書館が本を届けて回ったね！
昭和44年 中央館の全室に冷房が入る。

昭和48年 開館50周年。ロスと姉妹都市へ。後に中央館へ趣深いオブジェ（？）が贈られる

昭和52年 中区をのぞくすべての区に図書館設置

昭和59年 現在の中央館開館

平成8年 全館がオンラインでつながる

平成9年、面積が大きい区にはもうひとつ図書館ができる

平成22年 現在の21館体制に

平成29年 東日本大震災の復興支援のひとつとして、陸前高田市に田中さん（次ページ）が派遣される

令和5年 開館100周年！



応接室には、江戸時代の尾張にあった貸本屋・大惣（だいそう）の絵が。なかなかの充実ぶりだったようで、かの坪内逍遙が「心のふるさと」と言ったとか。うちの図書館もいつかそう呼ばれることを目指します！



自由研究は終わらない

第3回

田中里枝子さん

（奉仕第二係）

児童担当歴は20年以上、仕事以外にも児童図書館研究会（通称…児図研）や小澤俊夫氏主宰の昔話の再話研究会に所属している田中さんに、児童担当の魅力や子どもと本についてインタビューしてみました。



—もともと児童担当を目指していたんですか？

全然そういうわけではなかったです。働き始めた当初は一般担当だったんですが、先輩が児図研に誘ってくれて、流されるがままに入って勉強はしていました。その後、児童担当になったこともあってどんだんのめりこんでいった感じです。

—一般担当から児童担当になったときはどうでしたか？

大人とは違う子どもたちのダイレクトな反応に驚きました。これこそが児童担当の醍醐味なんですよね。子どもだからといって侮れない。最初の頃はその正直さが怖かったです。だって読み聞かせやブックトークを楽しんでくれ

ているかどうかすぐにわかってしまうので。ただ、その一方で、いわゆる「ウケる」かどうかにこだわりすぎではだめだと思っています。つまらなさそうで、全然聞いてくれないように見える子ども、その子の心のどこかには残ってくれていることがありますから。

—子どもの本であっても、やっぱり勉強って必要なんですよね。

そりやもちろん！最初は知識が足りないせいで先輩たちの雑談すらよくわからなくてすごく焦りました。勉強しないと！って。

—どのように勉強していったんでしょうか？

とにかく読む。いいとされる本を沢山読んで自分の中にちゃんと基準をつくる。これは絶対だと思っています。古典をもっと読まなければと焦っていた頃に、先輩が「今読んでいる本もいずれ

行って、藁の山に飛び込んだりしたのはいい思い出（笑）。

—田中さんの天真爛漫さが伝わるエピソードですね（笑）。子どもとの関わりで特に印象に残っている思い出はありますか？

沢山あるから悩みますね。港図書館にいたときに顔なじみになった子が、鶴舞中央図書館の2階までわざわざ会いに来てくれたこととか。あと、小学校に行つて『ものぐさトミー』の読み聞かせをしたときに、「本ってこんなに面白いなんて知らなかったよ」と言いに来てくれた子がいて、それも忘れられないですね。

—司書冥利に尽きますね！

本当に。別に子ども自身が夢中になれるものや打ち込めるものがあるのなら、無理に本を読まなくてもいいと思っています。でも本に携わっているので、一人でも本好きが増えてくれればそれはやっぱり嬉しいですね。

※松岡享子さん…児童文学者。東京子ども図書館の設立者の一人

思い入れのある本

『よみからかす』飯田治代／著 ゆいぽおと
尊敬する大先輩の著書。圧倒的な読書量に驚愕です。

『よかったねネッドくん』
レミー・チャーリップ／ぶん・え 偕成社
大好きな絵本のひとつ。人生はいいこととよくないことの繰り返し。でも最後は「よかった！」で終わりたい。幅広い年齢の子どもたちに喜んでもらえるので、急に読み聞かせをしなくてはいけなときのお助け本でもあります。自分でも買って、ネッドくんを引きだしにひそませていました。

『ねえ、おきて！』さとうわきこ／作・絵 ポプラ社
大学の司書課程の読み聞かせ実習に使う絵本を、同級生と学校の図書館で探しているときに出会った本。みんなで大笑いした思い出があります。

『たくさんのふしぎ』福音館書店
児童担当の時は福音館の絵本雑誌系には目を通すようにしていました。「地下につくられた町カップドキア」と「バルセロナ建築たんけん」で興味を持って実際にトルコとスペインに見に行ってきました。今でも大好きな場所のひとつです。

—児図研ではどんなことをしているんですか？

古典になるから大丈夫」と言ってくれて、ほっとしたことを覚えています。読むのがあまり速くないのですが、それについても松岡享子さん※が、速ければいいわけではなくてゆっくり自分の中に落とし込んで読めているならそれでいいと仰っていたのも心強かったですね。あとは研修や児図研などに参加したり。

—素敵ですね！ 行ってみたい！

ウィンメルビーという村にあるリンドグレーンのテーマパークがすごく楽しくておすすめです。やかまし村のモデルとなった村にも

名古屋市鶴舞中央図書館について

大正時代に開館して以来、あらゆる書物をせっせと収集・保存し続け、現在の蔵書は約140万冊。貴重な古典籍なども多く所蔵しており、一部はネット上で見ることができます（くわしくは「なごやコレクション」で検索を）。去年からは電子書籍サービスも開始。図書館に来る人も、来ない人も利用できる環境づくりを目指しています。来年はついに100周年。とはいえ（記念イベントはあれど）雰囲気をがらりと変えることもなく、これからも淡々と続けていくと思います。みなさんも肩ひじ張らず、普段着のまま利用してください。

おまけ

今も残る木造の階段

映像に出てくる書庫の古い階段、実は一部が今も保存されています。新館を建てる時、記念に何か残そうということになり、「書庫出納員の汗と涙がしみ込んだ書庫の階段」が選ばれたそうです。



名古屋市鶴舞中央図書館

電話：052-741-3131

FAX：052-733-6337

発行：2022年9月



↑バックナンバー



↑100周年特設ページ